

と言う。

(注)室町末期ごろから七種の福神(七福神)民間信仰がはじまったとも言われている。)

⑪ 安産神

拝殿の手前、西側のお堂に立派な木像で刻んだ安産神が祀られて居る。鎮座年代は不詳だが、其の昔、現代の様に医学も進歩しておらず、疫病と共に胎内に子を孕むと、一番心配なのは「難産」ではないかと、妊婦は数ヶ月前から心配の種だったのでしょう。なんとか安産で「らく」に健康な子供を生むことを祈願し、村中で安産神を祀ったのであろう。

⑫ 稻荷神社

安産神のお堂の中に稻荷神社を祀っておる。昔は八幡宮境内にも稻荷神社の立派なお堂があったが、年月を経て風雪で老朽化、何時となく稻荷神を安産神堂の中に移転安置した。

稻荷神社の主神は「宇迦之御魂神」で、食物と養蚕の神で「稻生」の義であった。

水田を主とした農村では春は「田ノ神」を迎え、秋は収穫が終ると「田ノ神」を山へ送り、田ノ神が「山ノ神」となると信じた。

そして「狐」を、田ノ神の使いと見る俗信が広がった。又、仏教では「茶枳尼天」が狐に乗る姿を混じており、これが稻荷を狐とする民間信仰を生んだという。

稻荷宮は今は大会社、工場、大商人などが個々で祀っておる所が見受けられ、商売繁盛の神として祀られて居る。

⑬ 神武天皇

お宮の参道を北上すると途中の西側に一丈(三米以上)余の堂々とした神武天皇を形取った石碑がある。

大東亜戦争当時、必勝祈願、皇記二千六百年を記念して講中の人々が寄進した。

神武天皇の和名は「カムヤマトイワレヒコノミコト」「ヒコホデミノミコト」で、第一代の天皇で建国の「祖」である。日向の高千穂の宮から舟軍を率いて東上し、大和に入って「ナガスネヒコ」を討伐、大和地方を平定し、紀元前六六〇年に第一代天皇の位についたと言う。百二十七才で薨じたとされているが、戦後、神武天皇については種々の異説がある。

⑭ 庚申信仰

八幡宮境内の参道東側に庚申塚があるが嘉瀬では「お庚申様」と呼んでおる。干支(えと)の庚申に当る日の禁忌行事を中心とする信仰で、起源は中国の「道教」とされている。

人間の体内には、三匹の「尸(シ)死体」又は「彭(ホウ)虫」がひそんでおり、庚申の夜に人が眠っているあいだに、ぬけだして、天帝のもとに登って其の人の罪やあやまちを告げて命を取らせるから、其の夜は眠

らずに身を慎んで過ごさねばならないと言う。

又、庚申様の「三尸」説に依ると、人間の体内に「三尸」がいて、三尸は形は無いが鬼神や霊魂のたぐいであり、人の早死をのぞみ、庚申様の日毎に天に登り人間の過失を司命の神に告げると言う。三尸の内の上尸は人の頭の中にいて、首から上を眠が見えなくしたり、禿、口が臭くなり顔に「皺」がより、歯が抜けるのは中尸の仕業と言う、下尸は腰から下を病気にすると言う、中尸は人の腹の中にいて五臓を病気にすると言う。

庚申様の日に昼夜、寝ないで起きていることが、三尸が身体からぬけだせないから守庚申と言う。

庚申様の本体も種々で、青面金剛菩薩が一般的であるが、猿田彦、道祖神などの神仏から「申」猿を見立て、生類である猿にまで及ぶと言う。庚申待(申待)は十干(十二支)の七番目の庚(カノエ)と九ツ目の申(サル)と組み合わせ、これを「日」に当てたのが庚申様の日である。

この日に其の「エト」にちなんで庚申待と言う行事をやることになっていて二ヶ月に一度の割でこの日がまわってくると、庚申講に入っている人達は、夕方から仲間の家に集まり、「お庚申様」と呼ばれている軸物をかけて其の前で唱えごとをする。

「お庚申様、お庚申様、舞タリ 舞タリ」と拝んでから一緒に食事をしたりお神酒を呑んで夜明までゆっくり世間話をするのが常である。又、「世間話はお庚申様の晩に」ゆっくり長話をする事から庚申待と言う。

八幡宮の西側(現況島)に旧 街道がある。此の旧街道は昔 金木に

往来する道路であった。金木には代官所が(現 金木病院付近)有り年貢米を納めるにこの道を通った。

古老の話に依ると八幡宮の西側には、昔 刑場が有り、罪人を処刑した場所だったと言う。

古町 鳴海勲氏が昭和六二年、八幡宮西側にある自分の林檎園の中の溝を深さ約一米位掘って行くと土器片が出土した。尚、掘って行くと住居跡らしく「カマド」の跡もあった。土器は支脚、土鐘、砥石で平安時

⑮ 鳥兜

八幡宮 北西の島とお宮の境界線に「鳥兜」トリカブト」が密生している。今から約四〇一年前の天正十五年(一五八七年)嘉瀬軍勢と金木軍勢が交戦、嘉瀬の西館、東館、嘉瀬城に嘉瀬軍勢が立籠り防戦、金木軍勢に弓矢を放ったが、此の時、弓矢に鳥兜の毒を塗り、毒矢を放った。百発百中、毒矢は金木軍勢に的中、数分後に毒が体内にまわり金木軍勢は「バタバタ」倒れた。

鳥兜は「きんぼうげ科」の多年草で有毒植物の一つで九月頃、梢頭および上方の葉液に多く深紫色の大型の花を開く、野生もあるが観賞用に栽培。茎、葉、花、根、みな猛毒をもつが、根は薬用に用いる。花の形が舞楽のときの伶人冠に似ているので、この名がついたと言う。(百科辞典より)

⑯ 刑場跡

八幡宮の西側(現況島)に旧 街道がある。此の旧街道は昔 金木に往来する道路であった。金木には代官所が(現 金木病院付近)有り年貢米を納めるにこの道を通った。

古老の話に依ると八幡宮の西側には、昔 刑場が有り、罪人を処刑した場所だったと言う。

古町 鳴海勲氏が昭和六二年、八幡宮西側にある自分の林檎園の中の溝を深さ約一米位掘って行くと土器片が出土した。尚、掘って行くと住居跡らしく「カマド」の跡もあった。土器は支脚、土鐘、砥石で平安時

代の物と言う。(和歴一四年頃から保延六年頃迄、西歴七九四〜一一八六、約一一九四年前から八〇二年前迄)

其の昔、岩木山の数回に及ぶ噴火や風化作用で自然に往昔の跡地が埋没したのであるが、今から数百年前に住居跡地や処刑場があった事が鳴海家の林檎園掘削から見ても窺がわれる。

⑰ 鳩へト

鳩は昔から平和の「シンボル」象徴である。神の使いとして遠く迄飛んで使命や任務を果すが戦時中 鳩は伝書鳩として国の為を尽したが平和の象徴(シンボル)である鳩に平和を願って八幡宮境内の両側に石像鳩を献上した。

(注) 神使、八幡宮は鳩。稲荷は狐。)

⑱ 鬼の石像

八幡宮 一番目の大鳥居は村社としては立派過ぎる程の木造の大鳥居であるが、約一七〇余年前に建立されたと言う。

第二の鳥居には「鬼コノ石像」があるが其の昔、冷コ水の古川勇之助が「男の子」に恵ぐまされず、男が愆しく鬼の様に強い立派な男の子が授かる様に「願」をかけ奉納したと言うが其の後、古川勇之助に神の恵みか立派な男子が恵まれたが喜びとうれしさのあまり「稗は強くて、絶えない」から「ヒイナイ平内」と名前を付けたと言う、現在の冷コ水町内の古川平内氏である。

⑲ 神馬

八幡宮参道の両側に神馬の石像が二基、向い合っている。大東亜戦争時に軍馬が不足し嘉瀬からも数拾頭の立派な馬が軍馬として出征、第一戦で兵と共に活躍した。

この出征軍馬が戦死しない様に神馬として活躍する様に村人は石像神馬を八幡宮に献上して祈願した。

⑳ 手洗水

拜殿のすぐ前にお手洗水の石台が両側に一基ずつある。拜殿に入る前に口をそそぎ、手を洗い心を清めて拜殿に入り神を拜むのに、お手洗水の石造物台が寄進された。

㉑ 奴踊発祥地碑

津軽四代藩主 信政公が金木新田の開田、開拓事業に着手したのは元禄十二年(一六九九)で宝永二年(一七〇五)の大事業の完成を見た。この新田開発は諸国からの移民が中心であった。

鳴海善左エ門の忠僕 徳助が、主人の不遇を慰めて、踊って唄ったのが、

嘉瀬と金木の間の川 石コ流れて木の葉コ沈む

誠実な者が恵れず狡猾な者は世の中にはびこる世相をうたった碑である。

㉒ 人丸神石由来

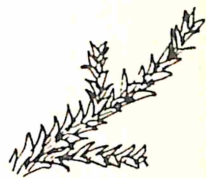
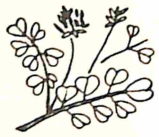
奈良時代前期の歌人 孝昭天皇の皇子の子孫ともいうが、伝記は確実でない。晩年は石見国(島根県)で和銅元年(七〇八)頃死んだとされる。文武天皇に仕えた宮廷詩人と言う、身分は地方官吏で低かったが

「万葉集」に長歌二十首、短歌七十首 「人丸歌集」 短歌三百四十八首 長歌にすぐれていると言う。天保の頃(一八三〇年〜一八四四年)、嘉瀬に山中竜助と言う和歌を好んだ人がいた。

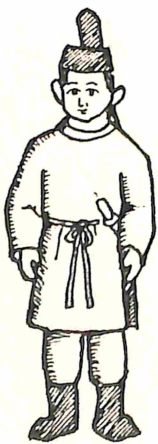
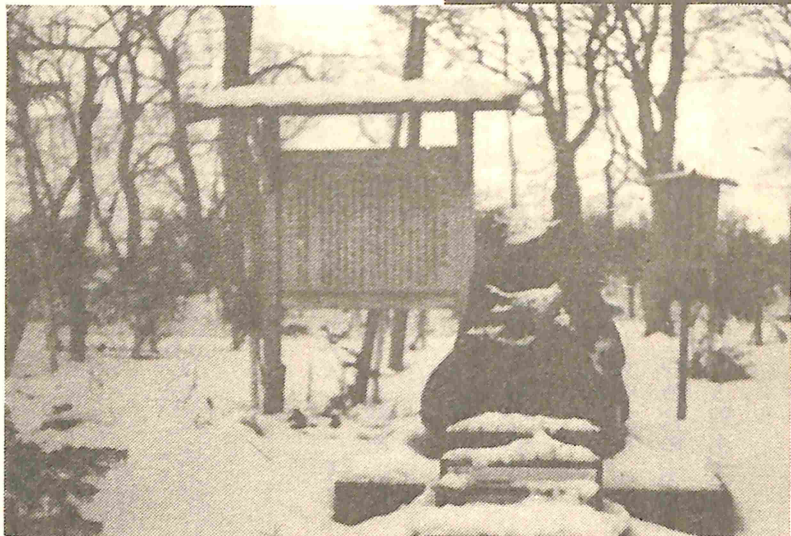
万葉の代表 柿本人麻呂を慕って止まないこの人に、或る夜、一人の翁が夢枕に現れ、「吾れは湖辺に廃棄された人丸の神石である。適地を探し安置供養せよ」と告げた。知人十数人の協力を得て十三瀨におもむき、湖辺にあった乱石の間から探した所、人丸の二字が刻れてあった。早速、清久溜池の東岸に安置した此処が今も言う人丸の岬である。

大正の頃に入り、人丸の神石は人丸の岬から姿を消し、金木小川町内に遷されていたが、人丸神石安置の宅地に住む代々の人々は不幸が重なり「或るカミサマ(ゴミン)に占いを受けたところ、人丸の神石は嘉瀬に戻りたがっていると告げられた」由来、有志らが相計って嘉瀬八幡宮の一隅に遷座安置した。

八幡宮石の掲額と
庚申様。この陰には
鍋石もある。



人丸神石



凧の由来

秋
元
幸
之
進



凧は二五〇〇年以上もの昔、中国で発明されたといわれている。その後東洋の全域に広まっていったが、西洋に広まったのは、一五世紀になつてからである。

中国で生まれ、東洋社会で育てられた凧は、人間にとっていったいどんな意味をもっていたのか考えると、第一には、凧は人間の絶えることのない大空へのあこがれを表現する。

気球やグライダー、飛行機を知らなかった昔は凧だけが大空を飛ぶ夢をかなえてくれるものであったろう。この夢から来て江戸時代の末期に関西地方で凧あげが大流行し、田や畑が踏み荒されるといふ理由で凧あげ禁止令が発令されたこともあった。

第二には宗教的な意味がある。大空を祖先の靈魂の宿る場所として、宗教的に重要視していた東南アジアの人々は凧を祖先の魂を交信する道具としてまた祭礼や呪術の道具として昔はよく使ったとのことである。

第三には、空を自由に飛ぶ鳥やチョウやトンボなど、自然の生き物を人間の手でまねて作り、飛ばしてみたいという気持を凧に託したということがあろう。自然を単なる道具や食物としてより友として自然になじみ、自然と対話したいという精神は、農耕民族である東洋の特長ともいえるのでなからうか。

実際に、中国では昔から鳥やチョウやバツタに似せた凧が作られ、現在まで伝承されている。

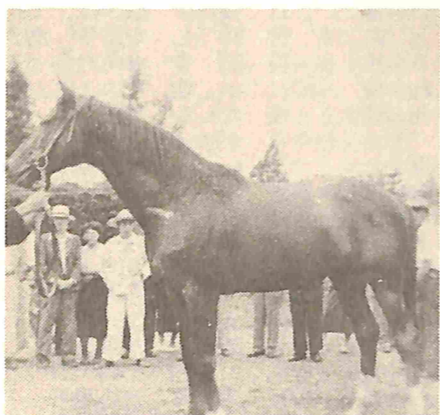
第四には大空をキャンバスとして、自分自身を凧に表現してみたいということにも大きな意味があったのではなからうか。伝統的な日本凧は、この意味を徹底的に追求したものであるといえるのではなからうかとくに武者、役者の絵を彩色豊かに描いたり、大きな立派な字を書いたりして、凧の表面を飾った江戸凧や津軽凧は、その典型的な姿といえよう。

第五には、競技の道具としての凧の競技は日本や朝鮮やインドでさかんで、「二本の糸をもつ平面凧の操縦性のよさ」を利用し、一方、糸をヤスリのようにして、他の凧の糸を切るといふ競技である。とくに長崎のハタあげは有名である。

以上のように人間にとって凧のもつ意味をいろいろと考えて見ると、いずれもまったく実用性のないままに今なお昔のままを伝え、生き続けている。

(凧の科学より)

外国から購入された種馬



記録

村から農耕馬が消えた

木村治利

「有為転変の世の習」、農民の生活に欠くことのできなかったウマが、今農村から消え、歴史のかなたに消え去ろうとしている。

かつて嘉瀬村に一〇〇〇頭のウマが飼育され、農作業に、運搬に利用されていたが、昭和三〇年頃から機械化農業に転変、ウマの労働は押し流され、人間との密接な関係も断たれて消えた。古くから人間の生活と密接な関係をもち続けたウマ、その存在を記録しておきたい。

※ 人間とウマの始まり

ウマが人間の生活と密接な関係をもちはじめたのは、原始時代といわれる。もとより野生のウマで洪積世人類の狩猟の対象としてであった。

アジア大陸では、北京近郊で骨や石器にまじって大形の最新世ウマの骨が発見され、その後の旧石器時代遺跡からも現存野生ウマの蒙古草原

ウマの骨が出土している。

ヨーロッパでも、第四氷河期にあたる後期石器文化の遺跡のうちには、大量の野生ウマの骨の出土があり、南仏や北スペインの洞窟遺跡には、野生ウマの生態をきわめて写實的に表現した壁画や彫刻が多い。これはそのころの狩猟民にとってウマがいかに重要な生活資源となっていたかを物語るものである。

現在の知識で知られている最古のウマの骨の発見される遺跡としては、イラン



四頭立による馬耕

高原のシアルク第二層が問題とされ、その年代は前四〇〇〇年のころまでさかのぼりうるであろうといわれる。

このように、野生ウマは世界各地に生息していたが、人間はウマもっている野性的なエネルギーや、ポリウムを活用し使役に利用するため、その体形を改良し家畜として飼育するようになった。

ウマの飼養と減少

一九三六年（昭和十一年）日本のウマの頭数は、一四三万頭といわれたが、大東亜戦争中、総馬数の三分の一を失ない一九四六年（昭和三十一年）には一〇五万頭に減少した。

戦争中は、よい農耕馬は軍馬として徴用され、兵器や弾薬、食糧等の運搬、そして騎兵隊など軍事上にも利用されたため、死亡が多く頭数は減少した。戦争が烈しくなるにつれ、村に青年達がいなくなり、労力不足、食糧難でウマの飼育が困難になっていった。即ちそれ程ウマの飼育は面倒であった。

ウマは牛のような反すう獣と異なり、単胃で小さいから、飼料は少しづつ回数を多く与えなければならなかった。エンバク、ふすまや干草、切葉に少し食塩を入れ、朝、昼、晩三回与える。穀類は消化に便利なように休養時間がながい夕食時に与えた。夕食から朝まで時間がながいので、毎日労役に使うときは夜八時頃さらに投草として、牧草や野草を切らず長いまま与えた。

水は常に給食前または使役の前に与える。一日四回以上で回数が多い方がよいとされた。馬舎の入口には小船のような「キチ」を吊し、いつ

でも水や飼料を与えていた。ウマは穀類など盗食すると死ぬまで食べるし、空腹になると、馬舎の板張を蹴ったり、柵の棒をかじったりする。

ウマは家族同然で、住居の中に馬舎を造り、それも居間に近い通風のよい、光線の射入もよく、夏は涼しく冬は暖かいところにあった。休養と手を十分にするためであった。

当時、ウマの交換や売買は、博労を通して行われ、貧農の小作人には高価な買物であったにもかかわらず、ウマの飼養の知識に乏しく、水が少ないと便秘を起し、過食させては胃破裂、排泄物が多いので敷薬が汚れがひどく手入れを怠ると蹄葉炎、その他炭疽、伝染性貧血）などで死んだり、罹病するウマが多かった。こうした原因もウマ減少へ拍車をかけたことも、否めない。

水アブリ場

村はづれの小田川や清久溜池に、ウマの水アブリ場があり、ウマが自由に水の中に入って行けるよう、ゆるやかな傾斜になっていた。

夕方になると裸馬にまたがった村人達が、ぞろぞろ村の十文字の広場に集まってくる。ここから水アブリ場まで気の合った若者達が競馬を行なうのだ。村人達は「イッチョク」と言った。溜池の水アブリ場まで三〇〇米ばかりの村道を裸馬に乗った若者が二人並んで全力疾走させるのだ。若者のはやしたてる中、ウマは主人のために「イッチョク」に疾走するのだ。勝負に関係なく競馬の醍醐味を味わった村人達は拍手した。

戦中時には、小学四、五年生になれば、ウマを水アブリ場に連れて行き、足やからだを洗ったりした。もちろん裸馬で疾走させたり、背中の

上に立上ったりして競走する子どももいた。

ウマは、主人に忠実に使え、甘え、利口で理不尽なことはしない。途中落馬しても、決して踏んだりはしなかった。水アブリ場は人間の社交場であり、人間とウマの心のふれ合いの場でもあった。

ウマによる運搬

戦前の重荷の運搬は、ウマにより夏は金車^{かな}、冬は馬橋であった。戦後になって、金車がゴム輪（タイヤ）車に改良され、橋も、よじ橋、馬橋、ばぢばぢの三種類になった。

よじ橋は、長さ七尺五寸（227cm）と決り、田圃に堆肥を運搬する橋で、下金が約三寸程と（9cm）広く柔雪でも埋まらぬように工夫されていた。馬橋は、固い雪道を歩く橋で、下金が厚く細く滑りやすくできていた。買物など町に出るときは自家用車である。橋の中には藁を敷き、その上にゴザ、そしてフトンを敷いて火鉢を置く。木枠をつけて天幕を張るので、中は暖かかった。

ブルドーザーのない昭和三十三年頃までは、道路に吹溜りの山ができ、橋はまるで、嵐の中の小舟のように、山を登っては谷底に激突した。積雪も多く、館コの辺りはカッチョ（雪囲い）を雪中に沈め、電柱も埋まり電線をまたいで、歩いたものである。高低の烈しい雪道を、重荷運搬は容易ではなかった。そのため一本の橋を前後二本に分け、鎖で繋ぎ、激突を少なくしたのが、ばぢばぢである。駄賃稼ぎや丸太運びのために利用された。

ウマの利用

ウマは、人間のため労役ばかりが利用されたのではない。皮は大鼓に張られ、靴、かばん、ベルトなど広く用いられた。尾毛やたてがみは洋服のしん地や楽器の弦などに、骨は箸、櫛などに細工されたり、骨粉として飼料や肥料にされ、ひづめは、櫛、べっこうの代用品として使用され、血液は粉末としてこう着剤、飼料、肥料に用いられた。また大小便の排泄物は堆肥として大切な肥料で、冬期に田圃に運んでものである。内臓からはいろいろの酵素やホルモンが得られるほか、破傷風血清などの採血用として人類にとって欠くことのできない動物であった。

馬肉

肉は、さくら肉と呼ばれ、栄養のよいウマは味もよく、ヒレ肉などは牛肉と区別がつきにくい。農耕が終った夏季に屠殺することが多く、そのころが淡泊で美味である。戦前は家庭内で肉と名のつくものは、殆んど食前にのぼらなかつた。鶏肉でも食べる際にはニラの隅にクドと鍋を持っていて食べたものである。それが終戦後急速に肉を食するようになり、その美味にウマは屠殺されるようになった。

絵馬の起源

村にある神社や寺には、ウマの絵やその他の絵を描いた絵馬が奉納されてある。祈願または報恩のためのもので、画家の手になる大絵馬（納

額、額絵馬)や名もない職人の手による小絵馬にいたるまで、その形や種類など多様である。絵馬の起源については「神道名目類聚抄」にあるように、古代の人は神様に祈願するとき、早く神様にきてもらうため、ウマを献納して乗ってきていただと考え、生きたウマを献納した。これを神馬といって神社で飼育したが何頭もおつても困るので、祈願者にウマの代金を納めてもらうと同時に、木や紙にウマの絵を書いて納めるようにした。

文献的には平安時代にすでに絵馬の存在が認められ、寛弘九年(一一〇一一)六月、北野天神奉納物中に色紙絵馬があり、天曆二年(九四八)五月に「降雨祈願のため左右馬寮より黒毛馬二匹を貢納すべきところ、繫飼料がないため板馬をもってせよ」という意味の記事がみえるとのことである。

板に描いた馬が一般的に行なわれたことは「今昔物語」からも知られるが、鎌倉時代以降に一般化し、また三十六歌仙額など馬以外のものも描く風が盛んになり、室町時代から江戸時代になると一層各種内容がもられるようになった。

※ 絵馬の民間祈願

絵馬は庶民の切実な個人祈願に発したもので、病氣平癒、妊娠、牛馬安全などの祈願を目的として奉納してある。

絵馬を奉納する目的は、ひろく様々の祈願の内容を具体的に神に告げるためであった。絵馬には神仏によって図柄の決っているのがある。

荒神(こうじん)にニワトリ、稲荷(いなり)にキツネ、天神(てんじん)にウシ、弁天(べんてん)にへびなど多くの神仏の使者とみられる

その農耕馬が、いつの間にか農村から消えていった。機械化農業に移行したためである。ウマは「馬鹿」とか、「馬の尻に念仏」などと笑われながらも、暗闇の中でも、吹雪で道路が見えなくとも、道路を踏み外すことなく、たとえ主人が轡の中で眠っても、胸につけた鈴を鳴らしな

動物である。津軽地方では「いたこ」(巫女)に伺いを立てて絵馬の図柄を決めてもらう風習がある。祈願が叶うと絵馬を二枚にしてあげる風習がみられる。

金木町喜良市の野崎町内には、今でも小犬一匹飼っている家がない。不思議に思って古老に尋ねたら、町内に稲荷神社がありキツネは犬を嫌うので、犬は飼わないという。神社の絵馬はすべてキツネであった。

※ ウマの風俗

ウマの種類は毛色で分けていた。青毛(あお)、鹿毛(かげ)、栗毛(くりげ)、月毛(つきげ)、葦毛(あしげ)などと呼んだ。また人間の相性にあつたウマを飼育するという吉禪的な考えも行なわれ、毛色を問題にする人もあるし、四白を嫌う人も多かった。

古くウマの大きさ(たけ)は、四尺(約121cm)を定尺とし、この定尺に一寸(約3cm)高いのを「一寸」、二寸高いのを「二寸」という。また四七寸までの寸を「き」といい、「よき」「いつき」「むき」といった。低い場合には「かえり」といい、三尺九寸のものを「かえり一寸」などといった。武家で四尺五寸(約136cm)の身長を元服の標準とし、成年とした風習と、四尺を定尺としたウマの高さに何か関連がありそうな感じがする。

※ 農耕馬は消えた。

ウマは、人間のため、幾百年も前から使役され利用され、生活を支えるため貢献してきた。農家には欠くべからざる動物であった。

がら、黙々と歩き続け、我が家に辿りつくのである。

ウマは、「正直一遍律儀真法」といった融通のきかない正直な動物であり、「正直者が馬鹿を見る」とはここから生れたことわざかも知れない。

江戸小咄抄

腹の内



さる所の生れ子、生まるるよりすぐに、おとなのやうに、いろいろのことをいふゆへ、めづらしがり、人があつまりて、はなしをするうち、一人が、子にむかひて、

「腹のうちに居た時のことも、おぼへがあるだらう。どのやうなところもちであった」

といへば、かの子がいふには、

「腹のうちは、八、九月ごろのやうだ」。

「それや、どふして」。

「丁度あつくもなし、さむくもなし、そふして、折り折り、下から松茸がはへる」。

(文政二年刊『恵方棚』)

遠目鏡

築山(つぎやま)庭に、山のかたち土や石でできいたもの(の)の上の亭座敷(あずまや風の座敷)で、遠目鏡にて東西を見れば、いろいろの面白いだらけ所に、北の方の高みに、きれいな二階座舖に、男女とも美しい奴、すれつ、もつれつする浦山(うらやま)しさ。姿は見ゆれど、口舌(くせつ)ここは、男女のはなしの意)が聞へぬ、やがて、目鏡を耳へ当て。

(安永年間刊『豆談語』)

遠目がね 耳にあてたく 思ふ也

(武玉川15)

江戸小咄抄



旧聞 タコ部屋など



山 中 正 津

タコ部屋について、タコ部屋一代の編者古川善盛氏は次のように解説している。

『タコ部屋の発生はタコ部屋の発生は必ずしもはっきりしているわけではないが、一般には北海道における拓殖土木事業が本格化していった一八九〇年代からだろうといわれており、その後、北海道鉄道敷設法の施行や拓殖一〇ヶ年計画のスタートによる土工夫需要の増大とともに全道にひろがり、北海道土木業の一制度として常態化していったようである。(中略)』

タコという語源についても確定した説があるわけではない。酒色におぼれて我が身を食うからだとか、一度現場にしがみついたら離れられなからだとか、自雇に対して他雇からきているとか諸説があるが、はっきりしない。いずれにしてもこの俗称の持つ語感やイメージが、庶民の土工へ向ける視線にびったりだったとは言えよう。タコという呼称が蔑視の意を込めて用いられたことは疑いが無い。正式には「募集人夫」と

噂が流れてくる。

海を越えて働きに行った者が二カ月も三カ月も使りがなければ「誰々はタコ部屋へ入れられたのだ」と村人たちは云うし、家族の者が手紙を出してもナシのつづてで、もうそうなれば心配を通り越してアキラメるよりなかった。

津軽から北海道へ雇いを売る職種は、ニシン場で働く漁業、開拓事業の土木作業などが多く、樺太では林業と云っても伐採作業の木樵りか、水産加工(缶詰工場など)であった。

古老の話によれば、嘉瀬からの雇い売りは樺太への木樵りが割と多かったとの事である。北海道でのニシン場稼ぎは「タコ部屋」は見当らないが、土工関係には集団でなく個人で行くと周旋屋の口車に乗って「タコ部屋」に入れられる事があると言う。

かたりべ第三集(61頁)に北海道鯨漁場労働漁夫の契約書写しが掲載されているが、期間は二月から六月末までの五カ月間で、労働期間中の給料金参拾五円と定め、全額前借金として請取っている。但し、契約に違背(約定どおり労働に就かなかつたり、逃走など)した場合は約定金七拾円を請求され、被雇人は勿論証人も連帯でこの義務を果さなければならぬ。という内容である。

ちなみに、三年ほど前に道南を旅した事があるが、その時のコースは、函館から長万部を経、ニセコを越えて余市へ。余市から日本海側の岩内、寿都、瀬棚、江差と海岸を通ったが、神恵内と岩内の中間に泊という村がある。ニセコ積丹小樽海岸国定公園に指定されている景勝の地である。

実は、この泊村はニシン漁華やかな頃「ニシン御殿(番屋)」が数軒建ってあったという。今はそのうちの一軒が村の公民館として残ってい

呼ばれ、これに対し前借金なしの普通の人夫を「信用人夫」と呼んでいる。

私たちが子供の頃は村から北海道へ「雇いを売る」に行く人が多かった。今で言う出稼ぎである。昭和三十五年の統計によれば、金木町からの出稼者数は二五〇名であった。それが昭和五十五年は大凶作という気象条件も重なったが、夏型、冬型合せて約二、〇〇〇名、総人口の四%余にも達した。

また、二十一年間に八倍も殖えたという事は出稼ぎという言葉が普遍的になったためか。

「ヤドイ」という言葉も、当時はその村の貧乏者のイメージである。ましてや「タコ」と云われれば地獄の果てに身売りしたように思われている。

それで村から「雇い」を売りに北海道樺太(サハリン)へ出かけた人の何人かは悪い周旋屋にだまされて「タコ部屋」へ入ったそうだ、との

るが、当時の豪華さが今に残っているし、現在小樽に資料館として建てられてある「ニシン御殿」もこの泊村にあったニシン番屋を移築したものだという。

ニシン魚網一統には二十五人前後の雇い人夫が必要で、津軽、秋田からの出稼人夫が大部分を占めていた。しかしこのニシン御殿を築き、多数の雇い人夫を必要としたニシン漁も明治三十年の九十七万五千トンが最高記録で、その後減少し昭和三十三年を最後にニシンは獲れなくなりましたと云われている。

私は、終戦直前異様な集団による飛行場建設の労働者たちが、何人かの土方の棒頭風の男たちが木刀を持って監視する中で、栃木県のある村はずれの田堰で夕方水浴しているのを目撃しているが、瘦せて骨と皮ばかりのような身体に目玉だけがギョロリとした真黒な膚の裸の群れが一言も声をたてず、水の音だけがパンパパンと聞えて異様な光景が夕焼空の中であったことが鮮明に記憶に残っている。時は六月で時間にして十分か二十分ほどであった。

この人たちは、緊急に飛行場を建設するため北海道から連れて来られた「タコ部屋の土工」だという話を聞いて、タコ部屋のタコというのは、地獄絵図(十王図)に見る亡者のようなものだなあ、と思ったものである。

現在の土木工事は、殆んどが建設機械により行われ、昔からの道具と云えばツルハシとスコップぐらいのものであるが、昭和三十年前半までは、縄で編んだモッコ(畚)やトロッコが土を動かす主たる器材であった。

ふとした機会からすぐ近くに「タコ部屋」を経験した人が居ることを